

非指示的遊戯療法の治療的意味 I

関係学的視点からの解釈

森 田 喜 治

1 はじめに

Buirski, P. らは「精神病理はむしろ存在する何かから、つまり、人の主観的な体験がオーガナイズされる元になった、複雑なコンテキストから生じると考えられる。」(2001 p16) と述べ、多くの精神病理が、精神内界の葛藤や、人格形成における発達停止から起こるものではなく、基本的には生活体験の中でオーガナイズされた、様々な用件によって生じことを示し、さらに、初期の **organising principle** をベースとして、その後の多くの環境因子によって与えられる、あるいは、子どもが求めるか求めないかにかかわらずさらされている環境の中から、**principle** に応じた刺激を選択的に吸収し、パーソナリティーに組み込まれていくものであるとされる。「人それぞれの人格とは、健全なものであっても、障害を持ったものであっても、生き生きとした関係性の歴史によって生み出されるもの」(Sameroff, A. J. and Emde, R. N. 1989 p86) であってそれらは社会的に認められているか否かにかかわらず、その環境の中で習得され、意識が誕生する以前に植え付けられた感覚は、意識された客観的事象ではなくなり、主観的な事象としてパーソナリティー内に組み込まれていくことになる。(Sameroff, A. J. and Emde, R. N. 1989) しかし、幼少期の体験が、平均的社会通念(その時代の文化背景を含めて)から逸脱したものである。と、成長した後、平均的社会に触れた子どもは家庭の中で体験してこなかったできごと、あるいは、パーソナリティーに組み込まれた価値判断との違いに出会いストレスを溜め込む事になる。そして、その食い違いが大きければ大きいほど、子どもにとっては耐えきれないほどの大きなストレスとなり、そのストレス故、不適応行動が出現し、悪循環を形成することになる。そのオーガナイズの基本となるモデルが、かつての家庭の家族構成員であり、環境である。そして、モデルから得た体験は将来の行動に対する最も重要な持続的な影響を

もたらすものとなる。このように、自己は社会において造られ、他人との関係において揭示され、維持され、変容されるものである。(Sameroff, A. J. and Emde, R. N. 1989) しかし、一般社会の価値観と大きな差を持った家族の中で生活してきた子どもは、外界に存する出来事を、初期の家族関係の中で得た体験をもとに選択的に拒否、あるいは回避することで、自己の存在を守ろうとし、それが、周囲からすれば逸脱した行動として捉えられることになることがある。彼らは未知の世界から侵入してくる刺激から自己を守ろうとするために、非社会的になるか、あるいは反抗的になることで反社会的になる。例えば回避的愛着関係歴を持つ子どもは時としてうちに引きこもるような低い自己価値観、孤立、怒りを伴う拒絶感を持ち続け、(James, B. 1994) 行動する可能性を持つが、当の子どもにとっては、彼の体験してきた母親との関係が回避的愛着関係であるという理解はない。むしろそれが、子どもにとっては当たり前の関係であると認識している。そのため、自分たちの体験とは違った未知の平均的なかわりかは、彼にとっては恐怖となり、自己を守るために他者とのかわり合いを避け、孤立したり、進入する他者に対する攻撃的行動をもって排除しようとする行動が見られる。そして、その特性は「いったん形成されると一生を通じて活動が続ける『かかわり合いの領域』であり、それぞれの領域における病理は、生涯を通じ、どの時点でも起こりうる。」(丸田 2002 p53) また、かつて体験してこず、成長して後に体験することになった様々な快い関係を補足的に得ようとするために、年齢にかかわらず、食欲にそれを求め、直接的でなく、間接的なスタイル(例えば万引きのような代替の行動)を持って行動することになる。これらの内的現象の表現として現れる行動は、パーソナリティに組み込まれ、特別意識されることなく行われるため、当の子どもにとっては、コントロールの難しい事態であることが想像できる。

子どもは環境の多くの刺激を通して、社会性を成長させはするが、これらの侵入的体験は少なからず、子ども達にストレスを与え、そのストレスを乗り越えていく精神的なパワーを備えていない子どもには、これらの刺激に凌駕され、衝動的、破壊的行動が出現する。自我は自己の内的衝動と、外的要請との間で、葛藤する行動をコントロールする一定の力となる。そしてその自我は、過去の受け入れられ、承認された体験を積み重ねていくことを必要とし、母親の情緒応答性によって乳幼児は対人関係における情緒発達を続けることができ、その結果乳幼児は分離経験に対処したり、母親との再会を楽しめたり、母親がいる場面で安心して探索を行うことができる。といった自我の強化された

活動をするようになる。(Sameroff, A. J. and Emde, R. N. 1989) しかし、十分に受け入れられた体験(受容的で、共感的な母性的なかかわり)を持たない子どもにとっては、表面に見せている適応的な行動が、結局親が子どもの要求に答えることで強化されたにすぎず、(James, B. 1994) 何らかの不全感を持ったまま成長する事になり、自己不一致状態が継続することで、機能した自己を体験することができず、不適応行動となってしまう。

これらの、基本的な変容に注目すると、心理治療は時間のかかる作業であり、表面化している行動の変容にのみ注意を向けるのではなく、その行動の起こす原因となっているもの、つまり外的現象を誘発する内的現象に、着手することであり、人格の変容を目指すところにその目的を見い出すことができる。

2 非指示的遊戯療法の理論的背景

① 非指示性について

非指示的遊戯療法は Rogers, C. R. の弟子である, Axline, V. M. によって提唱され, Rogers, C. R. の非指示的カウンセリング技法の理論をもとに, 子どもの有効的な治療法として実施されている。Rogers, C. R. の述べる非指示的技法は, 「前進する力や健全な成長へ向かう一定の傾向は, 人間に関する最も深い真理である」(1963 p92)

「人間は生まれつきそのすべての能力を有機体を維持したり拡大する方向へと発展させるように動いている」(1963 p95)

「人間は明らかにある人間関係の中で十分に知られ, 十分に受け入れられることを望んでいる」(1965 p101)

「人間がたとえ不完全ではあっても, 成長し, 発展し, 可能性を実現する機会を与えられるならば, 人間が捨て去って行くのはこうした行動特徴(野獣性, 残忍さ, 欺瞞性, 防衛性, 異常性, 愚劣)である」(1965 pp92-108)

といった特有の人間観に基づいて行われている。

人間が自己に開かれ, 本当の意味での自由を得たときに人間は有機的に働くようになり, 前述の Rogers, C. R. の人間観を受け, Axline, V. M. は子どもの内的世界についても「個人が自分の問題を十分に解決できる能力を内部に持っている以外に, さらに, 未熟な行動よりも, 成熟した行動をもっと満足させる成長への衝動を持っている」(1947 p18) という自己治療力の存在と成熟に向かおうとする人間本来の方向性を持っていることを示した。これらの仮定に基づいて積極的に指示を与えなくとも子どもを受け入れ, 共感的に理解するこ

とで、自ずと内的な世界の変容を遂げることができる。そして、そのために、治療者は、クライアントを信じ、クライアントを尊重し、クライアントが治療者との開放的で自由な感覚を体験したとき、クライアントもまた、解放され、治療者との自由な開放的な、承認された関係を結ぶことになる。そして、その体験によって、クライアントはより確かな自己尊重感を抱くと、新たな行為を試すようになり「十全に機能した人間」に近づく。そして、この理論をベースとして子どもに心理療法を実施する場合、子どもの言語ともいえる自己表現的な様式である遊びを媒介にすることが必要になる。子どもの可能性を信じ、自ら成長する能力をもつという子どもへの信頼をもつと、子どもに自由を与え、自己に気付く場、機会の提供が重要になる。そのため治療者による非指示的遊戯療法の技法が考慮されることになった。しかし、非指示的技法を提唱した Rogers, C. R. は、「非指示」ということばが「放任」と誤解されることが多く、1951年来談者中心療法とその名称をかえることになる。現在でも、非指示的技法を「放任」とする誤解が見られる。

「我々は、人々を社会的にしたり、成熟させたり、愛情深くしたりすることはできない。しかしながら、我々は、親と子が自分自身をもっとはっきり眺めたり、自分自身の目的をより深く追求したり、自分がとりたいと望む方向や、自分自身の目的と一致するよりはっきりと意識的に選択できるよう助けることができる。」(Rogers, C. R. 1943 p25) という Rogers, C. R. の理解に応じ、非指示派の心理治療は 1, カタルシスの過程。 2, 自己理解や洞察の発展。 3, もっと適切な目標やその目的へと導く決定や活動の出現の方向へと段階を経て自らの足で歩むようになり、「十全に機能した人間」になろうとする方向に歩みだすことを助けることを目的としている。

関係学派で頻繁に用いられる、organising principle は、子どもが早期の親子関係を通して、初期の段階で身につけた、理解、思考、行動、認識の基本的スタイルであって、これらのスタイルを中心に、子どもは、外界にある多くの刺激から選択的に自己の principle にあった刺激のみを否定的、あるいは肯定的な意味にかかわりなく、内界に組み込み、パーソナリティーを成長させていく。そのために、子どもは、親から受け継いだ、スタイルを継承し、行動する。しかし、その家庭の文化が平均的他者の家庭とそのスタイルに違いがあると、子どもは他者との関係の中で、不適応行動を呈することになる。つまり子どもたちの見せる行動の特性は、その家族の中にある特徴的文化を引き継いだものでありそれが平均的家族の対人関係スタイル、社会とのかかわり方と近似

的であるがために社会的不適応行動として表現されることはない。そしてさらに、それらの文化が過去の家族から連綿と受け継がれていくことによって、その家庭の一定の文化をなすことになることがわかる。しかし、子どもは、個人的資質として、生活の中で受け継いだものがその時代の文化と相容れない場合、外界からの軋轢や食い違いによって、ストレスを溜め込むことになる。そしてこのストレスを乗り越える自我の力を持てなかった場合子どもは、これらの溜め込まれたストレスが、問題行動を誘発する種となり、さらなる周囲からの軋轢によって、パニックが生じ、外傷的体験、あるいは、突然の周囲の変化、発達による内外の変化により混乱が生じ行動として表現される。

非指示的遊戯療法は前出の Axline, V.M. 仮定 (1947 p18) にもとづいて「あまり自身がなくて、個人が公然と自分の行為の方向を定めることができず、直接というより、代理的に自己実現を遂げて満足し、しかも、この動因をほとんどまたはぜんぜん、より建設的でより生産的な方向に向けられない」(Axline, V.M. 1947 p17) といった不適応行動を示す子どもが、自由な環境の中で自己実現を果たし、これらの不適応行動に対して、外界との差異に気づき、理解し、自らが変容していく過程に援助を与える方法である。この基本的な変容がない限り、子どもはたやすく、本来の、principle に沿ったパターンへと戻っていくことになる。すなわち、organising principle の変容が心理療法の目的となり、その変容をもって、「十全に機能した人間」になるという目標を達成することが可能になる。しかし、家庭の崩壊や、家庭を構成するメンバーの変化といった、大きな、急激な変化は、子どもに大きな負担をかけることになり、一時的あるいは、永続的な影響をもたらす可能性をもつ。たいてい行動面での問題の原因は子どもの体験ではなく、それ以外のすべて、つまり身体的病気、慣れない環境にある。(Sameroff, A. J. and Emde, R. N. 1989) 子どもは、それらの変化に容易に順応できるものではない。そのため、「敵意に満ちた世界の中でいつも自分を確立しようと戦って」(Axline, V.M. 1947 p77) いる存在であり、ストレスを溜め込んだ状態を、維持し続けていることが想像される。子どものパーソナリティ成長の際に重要となるその基本的な関係は初期の親との非指示的な関係である。親は子どもの表現する内的な要求に共感的に理解し、さらに、これらの要求に対してすぐさま反応することによって、子どもが親との快い関係を形成し、親のもつ感覚、意味を内在化し、その肯定的な意味を持った内的対象に守られ、育まれる体験を繰り返すことで、それをエネルギーとし、また一方ではモデルとして他者との基本的な人間関係

を形成する。こゝ肯定的な人間関係の中で、子どもは、親の示す行動に着目し、自分自身のあり方を模索し、親の持つ特性を自己の特質として、持ち続けようと努力する。親はまた、子どもの母親を受け入れようとする行動に注目して、それらを歓迎し、子どもに肯定的な感覚を身につけさせようとする。治療者は、こういった親の持つ特性をベースとして、治療者特有の関係を子どもとの間で持つことで、子どもが自己のパーソナリティーを成長させる手助けをおこなう。

非指示的であることは、自由度の高いルールの中かで、子どもはかつての体験で培った特有の対人関係のとり方やおもちゃの用い方の特徴を見せるようになる手助けをしてくれる。さらに子どもは彼らの内的世界で起こっている、わだかまりや、ストレス、トラウマをも表現し始める。それが、非指示的な自由な空間であるが故に可能になる。非指示的であるということは、子どもの存在そのものを認める事になる。その基本的な理念は肯定的な人間関係を形成しその肯定性の中で子どもの成長を助けることである。非社会的ないしは犯罪の人間の行動となるのは、普通考えられているような超自我の弱さや欠如ではなく、逆に超自我の過度な厳格さや残酷さである、(Klein, M. 1933 p7) つまり、厳格なしつけや、指示、抑圧は子どもの不適応行動を誘発することにもなりかねない。それは、子ども一人ひとりによってその受け取り方に違いのあることが想像されるため、子どもの目我エネルギーのレベルを始め、しつけの程度が子どもの肯定的感覚と結びついている必要がある。非指示的であることは、子どもに対して、初期の肯定的な人間関係の形成を促すことになる。

人は、その対象である、他者との肯定的な人間関係を結び、お互いに、注目しあうことで、重要な他者の存在を認め、それゆえに子どもはその関係の中で自己の行動の変容を遂げる事になる。いわゆる、治療の方向へと向かう。子どもたちの行動の多くは、他者との関係の中で変容していくのであり、治療関係の中で見られる治療者との相互関係にも重なる。

秩序を維持するための社会的スキルを身につけることの重要性は異議をはさむところではない。しかし、心理治療の立場からは、子どもたちの不適応行動に至る内的現象に目を向ける必要があり、外的な現象を通して、彼らの内的な世界に触れていくことがその中心的な課題になろう。子どもの表面にあらわれている不適応と思える行動を、しつけの領域で単純に抑圧するのではなく、この行為の中にある子どもの内的なメッセージに、目を向ける必要があり、それが子どもの心理にかかわることになるのである。できない事に教育やしつけを

行うことは当然のことであるが、できるのにかかわらずしないことには何らかの内的現象、心理的なメッセージが隠されている。それらが子どもたちの行動の中に表現され、それを受け取り受容され、理解される事により、子どもはその人間関係の中で適応的な行動に変容させるように自ら働いていくのである。肯定的対象に対して、子どもは自分のスタイルに応じた肯定的関係を結ぼうと努力する。そしてこれらの様相は、非指示的アプローチをもって子ども達を自由な空間に置く事によってもたらされるものである。

指示は、子どもの生の心理的表現を許すのではなく、我々の生活する環境、秩序の中に適応させていくことを目的としておこなわれる。しかし、子どもの心の生活を保障するものにはならない。治療に訪れる子どもたちは、日常の環境の中で、何らかのストレスフルな体験をしていることが想像される。そのため、自己不一致状況となり様々の症状や、破壊的、あるいは、非社会的行動を通して内的なストレスや、不全感、抑圧された感情、欲求を表現する。彼らは、日常、多くの大人からのアプローチによって傷つけられ、また、理解されたい欲求を受け入れられないままに、多くのストレスを溜め込んでしまっていることが多い。そのため、彼らの行動は、理解されたい欲求に満ちている。しかし、彼らの非社会的、反社会的行動は、その表面に現れている行動の不適切性ゆえに、指示され、あるいは、強制的に修正されることによって、内的真実を理解されないまま、更なる抑圧を受けることになってしまう。

心理治療の場面は、子どもの自己開示的なアプローチを求め、その中に見られる彼らの心の世界に関わることを目的として行われるところにある。人間は本来、環境の中で、集団として生活することを望み、さらに、理解されることを望んでいる。心理治療の場面で、彼らに指示を与えずにかかわることで、彼らの内的世界を理解しようと努力することは、彼らの逸脱行為の下にある本来の意味を大人に伝達できる唯一の機会となる。治療者との間での、この肯定的な人間関係ができると、子どもの側から指示を要求するようになり、子どもはこの過程の中で形成された肯定的な人間関係を崩さないように努力し、適応的な行動をとるようになる。そして、それは治療者が要求するからではなく、子ども達が関係をとることを望んで発しているものであり、‘させる’ことで発しているものとは違いがある。

事例1

小学校5年男児Aは、生活の中で著しく反抗的、攻撃的で、施設入所当初は養育者の言う事に忠実であったが、次第に反抗的になり、手に負えない子ども

へと転進した。協調性がなく、養育者の言うことをきかず、いえば返って禁止されたことをする子どもであった。Aが3歳のころ、医者 の誤診によって母がなくなり、母に頼りきりであった父親は生活を維持できなくなり、子ども達を おいて失踪した。治療場面では、制限をことごとくやぶり、治療者に対しても 攻撃的であった。Aの攻撃的対応に対して、その行動の意味を検討しながら、 Aの行動を抱えるよう治療を進める。1年をすぎたころから、攻撃行動は減少 し始め、「こういうときはどうすればいいのか」と、生活場面であるできごと の対処の方法を治療者に尋ね、生活場面では、治療者に教わった方法でかわり、反社会的な行動は減少していった。

Aは自分自身の家庭生活で、不適切な親から不適切な関わりを体験してきた ことが予想されるが、Aはその生活環境の中で獲得した特別なかわり方を習 得したまま施設に入所する事になる。非指示的なかわりは、Aの全人格を肯定 する事になり、それに評価を与えるのではなく、また、積極的にしつけるの ではなく、「今、ここ」にある自分自身を受け入れられる体験を積み重ねる事 によって、肯定的な自己像に力を与えられ、生活環境の中にあるA自身の不協 和をA自身が調整していったものと思われる。もちろん生活場面でのしつけは 継続されていたのではあるが、それもうまくいかず、治療場面では生活の中で 溜め込んできたストレスを開放するかのように行動していた。

否定的な自己像を受け入れられる体験をしたとき、子どもは人間関係の中で 十分に知られ、十分に受け入れられたい欲求を実現することができるように なったことが想像される。

事例2

統合失調（当時は分裂病と称されていた）のため、コミュニケーションに著 しい障害がある27歳女性Bさんのカウンセリングにおいて、来談者中心のスタ イルで面接を行った。当初、緊張すると言葉のサラダが出、カウンセラーには クライアントの伝えようとしている内容が言語ではほとんど把握できない状況 であった。また、時折理解できる内容の話がなされても、カウンセラーから質 問をすると、たちまち、話は別の話にとんでしまっ て脈絡のない話になるか、あるいは言葉のサラダが出現してコミュニケーションが崩れてしまう。1年半 を経過し、カウンセラーも漸く、わずかながらコミュニケーションが取れるま でになってきた折に、面接の録音の許可を求められる。次第にコミュニケーションが可能になり、クライアントの声にも力がみられるようになったとき、ク ライアントから次のことが明かされた。

「先生は、私のわけの分からない話に一生懸命耳を傾けてくれた。今までの
お医者さんは、私が統合失調であり、著しくコミュニケーションに障害がある
ことを知っていたため、私の語ることを聞いている風な振りをしていた。気づ
かれていないと思っていらっしゃるのはお医者さんで、どうにもならない私の
苦しみには気づいていないようであった。苦しんでいる自分にはそれがよく分
かっていた。そのとき、本当に耳を傾けてどうにもならない言葉をきこうとし
てくださっている先生とコミュニケーションしたいと思った。それで、この会
話を録音し、自分のコミュニケーションの崩れるところを自分なりにみつけそ
こを修正するように努力した。もし、先生にも同じようにかかわられていた
ら、私は向こうの世界（病気の世界）に埋没していたことだろうと思う」

Bさんは程なくハワイで結婚式を挙げ、芸術家として仕事をしている。もち
ろん病的な部分がなくなったわけではないが、少なくとも、言語的コミュニケ
ーションは可能になった。

一般的に来談者中心のアプローチが統合失調の患者の治療に適さないことは
知られている。しかし、かかわる側が、心を開き、クライアントの語る言葉、
言葉にならないコミュニケーションに真摯に耳を傾けることによって、クライ
エントの内部でコミュニケーションをとろうとする動機付け、とりたいと思う
欲求が出現することになる。そして、その動機付けは、病気そのものは直らな
いにしても、一応のコミュニケーションができるまでに回復させることが可能
であった。結婚の日取りが近づいたとき、緊張し始めたクライアントには時折
言葉のサラダが出現したが、カウンセラーが指摘すると、クライアントも自覚
できていることを語った。

子どもが本当に心を開き、文字通り自由に自分を語るができることとすれ
ば、それは、まず自分の受け止め方の妥当性が受け入れられたからである。つ
まり、内的な世界を表現し、それについての変容を求め「十全に機能した人
間」になろうとする時、子どもは、信頼のおける他者との肯定的な関係を求め
ようになる。するとおのずと、対人関係にかかわるルールが形成されること
になり、適応的なスタイルのアプローチが作り出される。子どもたちは、かつ
ての生活環境の中で作り上げられてきた、現実社会と少々ずれたシエマであっ
たとしても、彼は、治療者側の、相手の習慣に限りなく近づこうとする努力、
いわゆる持続的共感的検索態度で（丸田 2002 p82）かかわられることで、承
認される体験をもつことになる。その結果自己肯定感をうみ、受け容れてくれ
る対象に対する肯定的感情を生み、その肯定的対象を内在化し、その対象と関

係を結ぶことで、肯定化された自己像を形成することになる。そして、重要な第三者（この場合は治療者）による信頼の力を得て、自我を強化するのである。そのためには心理治療者は「自分自身の価値を相手に押し付けないように十分に気をつける」（Barton, A. 1974 p199）必要がある。治療者は「彼の行動は彼の世界の体験方式にまさしく調和している」。そして、「クライアント中心の治療者は、この内的体験にまさしく調和し」「この内的世界体験の世界に移り住んで、クライアントを理解したいと思っている」（Barton, A. 1974 p200）存在である。「クライアントの内的な準拠枠を理解できない場合にのみ、クライアントの行動は、ばかげた意味のないものに見えるもの」（Barton, A. 1974 p201）であって、この準拠枠に従って、治療者はクライアントの起こす行動の理解を追及し続けるのである。クライアント中心療法は「指導とか専門的解釈はすべて本質的に、知識や理解や知恵が、クライアントの体験世界から外れた準拠枠と体験の中にあるのだという信念」に基づいて施行される方法であり、そして、それはすべて「彼自身の体験世界の中で意味付けする」（Barton, A. 1974 p207）ものであるため、外部からの我々個人の身勝手な価値判断の押し付けは、また、子どものストレスを増長させることになる。

子どもは、人間関係の中で生活し、その初期において、母親との望ましい人間関係を持とうと努力し、この対人関係は、子どもの将来の対人関係のスタイルを決定する。しかし、この際、家庭の中に、常識として通じ合っているコミュニケーションのスタイルに、平均的な家族と、少々の違いがあった場合でも子どもはその環境になじもうとする。それが、子どもの恒常原則に反していたとしても、それに防衛的になりながら行動の特性をつくる。それは「傷つきの繰り返しから自分を守ろうとする健全な防衛」（丸田 2002 p85）であると考えられ、その家庭の中で培われてきた **organising principle** が、いかに現実の歪曲に見えようと、内的欲動やファンタジーの産物ではなく、発達途上における実際の自己体験の産物であり、当時のコンテキストにおいて、「受け止め方の妥当性」（丸田 2002 p86）を持ち、適応的だったのである。

前自生的であった **organising principle** を治療者によって言葉化してもらうだけで、人生の大きな転換を迎えることがあり、しかも、この治療者の助けをかりて子どもの心理治療は成立するのである。

② 遊戯の意味

子どもにとっての、遊びは、単に余暇のものではなく、彼らの心の世界を

表現する言語であり、「精神療法のコミュニケーションの一形態になりうる」(Winicott, D. W. 1971 p58)のものである。さらに「遊ぶことはそれ自体が治療であり」、「子どもは遊べるように調整してやること自体が、直接的普遍的な応用性を持つ精神療法なのである」(Winicott, D. W. 1971 p70)。また、「遊ぶことは一つの体験、しかも常に創造的体験なのであり、そして、生きることの基本形式である時間―空間の連続体における体験である。」(Winicott, D. W. 1971 p70)と述べられるように、遊びが子どもの体験として、生きることの基本であり、さらに治療的にも意味のあるものであることが示されている。

子どもは、自分たちの体験してきている多くのこと、あるいは、その際に心の中に沸き起こる様々な感情について、それをうまく表現できる能力が未熟で、言語をつかって、表現できない。大人でさえ、自己の感情を表現し、他者にそれとして、その内容を伝えるのには、かなりの困難を感じ、また、うまく表現できないことによって、多くのストレスを体験する。

遊びは、1、束縛を受けず、自由であること。「精神療法をやろうとするならば、この遊ぶことは自発的でなければならないし、決して盲従的であったり、追従的であったりであってはならない。」Winicott, D. W. 1971 p71) 自由と放任はその性質上近似的ではあるが、遊ぶ対象との関係の中での自由は、盲従的でも、追従的でもない。対象が子どもを受け入れる容量の大きさによってその程度は変わる。治療者は子どもそのものを全面的に受け入れようと努力する対象であるため、できるだけ子どもの自由を尊重する。

2、評価のないこと。「遊ぶことの中に『本当の自己』の可能性があるということなのである。それを条件付きの可能性というのは、遊びは終わるからである。」(Winicott, D. W. 1971 p64) 評価は、子どものあるべき姿を否定する事になる。その中で、子どもは評価者によって受け入れられなさを募らせる事になり、否定された自己像とのかかわりが生まれる。自己が否定されると、子どもは前進する力を失いかえって不適応行動が増加する可能性をもつ。従って遊びにおいては子どもが自由に自己表現できる場を守るために、評価は禁物である。たとえ、肯定的な評価であっても、子どもは肯定的評価に束縛される事になり、失敗のできない不自由さを抱える事になりかねない。

3、創造性のあること。「遊ぶことにおいてのみ、個人は、子どもでも大人でも、創造的になることができ、その全人格を使うことができ、そして、個人は創造的である場合にのみ自己を発見することができるのである。」(Winicott,

D.W. 1971 p87) 前の二つの原則が達成されたとき、子どもは創造的行動を増加させる。自由であり、評価されないとき、子どもは自由に創造的に遊びを楽しみ、その中に、否定的な自己像をも表現する事になる。

これら三つの原則が実行されることで、遊びは成立する。しかし、このどれもが、何らかの形で、実現できなくなったとき、遊びは、その機能を失うことになる。

この観点から見ると、指示的な遊びは、その機能を失い、本来遊びが持つ治療的な意味合いも失われることになる。明らかに、遊びは教育ではない。教育は、他者による、秩序の伝達であり、それは、家庭や社会の中で、適応的になるためかなり強制的に行われることになる。しかし、心理的治療を目的とした場合に、遊びの持つ、自己表現的、創造的特質は其中で、治療的意味を持つ。

すなわち、遊びには、1) 関係としての遊び、2) 自分を大切にされる場としての遊び、3) 人間関係の投影の場としての遊び、4) カタルシスとしての遊び、5) 代償行動としての遊び、6) 表現としての遊び、7) こころの作業の〈場〉、〈手段〉としての遊び、8) 守りとしての遊び(弘中 2002 pp26-30)に分類することができ、その中で子どもは肯定的体験を培っていく。そして外界との関係で体験した、ストレスの発散を含め、新たな肯定的体験を積み重ね力を得、自己に目を向けていく事になる。このような補償的な内容に関わる遊びだけではなく、より深いレベルではいわゆる無意識とのかかわりで体験している内容で、象徴的なレベルでの表現もみられる。

事例3

6歳女児Cは、統合失調の母を持ち、それが原因で離婚、家庭崩壊に至る。母親は症状が悪化すると、Cに、絵の具の混ぜこまれた食事を与えようとしたり、腐敗したものを食卓に並べたりすることがあった。また、母親が攻撃的になるとCに包丁を突きつけ脅かし、逆に、Cを極端にかわいがり、包丁を突きつけたことをわび、Cが自分から離れていってしまうことを恐れた。このような母親をCはプレイの中で魔女として登場させる。魔女である母は、捜し求める娘の前を宙を舞いながら逃げたり、声をかけて自分に近づかせ、近づいたかと思うとまた、飛び上がって姿を隠してしまったりする。そして、最後に、娘を捕まえ、包丁でずたずたに切り刻んで食べてしまう。

事例4

小学校4年男児Dは、父親のDVの結果母親が家出。父親は家庭を維持する

ことができず、Dが3歳の頃施設に入所する。Dは著しく攻撃的で、生活場面ではナイフを持ち出して同室の子どもと大喧嘩をし、自ら傷ついて、手当を受けたこともあった。日頃は力の弱い子どもを相手に、親分になり、子ども達を先導しては問題を起こし、学校でも問題児となっていた。注意を受けても一切入らず、しつけ、教育的アプローチはその意味を失ってしまっていた。小学校4年の頃のプレイで、治療者との再三にわたる自分に有利になるようにしつらえられた戦いの末、あるとき、Dと治療者、両者共に同じ命を持った者同士の戦いとなる。そして、治療者を殺したあと、戦うものがいなくなると「切腹いたす」と自害し、2年近くに及んだ戦いに終止符が打たれる。そして、コタツの中を真っ暗な山奥とし、そこに古い汽車を展示した博物館を造り、線路が敷かれ海と山とが繋がった。そこを新しい汽車が走り、海から重要な物資がその博物館のある山まで運ばれるようになる。そのプレイの後、今までの攻撃的な行動は影を潜め、生活担当職員があまりの変化に、大丈夫かと心配するほどまでに落ち着いた。その頃、Dの知らないところで彼の人生にかかわる大きな出来事が展開されていた。Dが乳児の頃に家出した行方不明の母親から突然連絡が入り、Dを引き取りたいという申し出がなされていた。まだ、会ったことのない母親に戸惑いながらも、急遽退所となった。

事例5

武史の父は暴力団関係者で、武史に暴力を振るい身体虐待とDVにより家庭崩壊。小学校2年で施設に入所する。協調性がなく、自己中心的で生活担当職員にとっては手のつけられない子どもであった。プレイではロボットを使った戦いが繰り返されるが、武史のロボットが敗れることはなかった。ところがあるとき、今まで負けたことのなかったロボットが治療者の攻撃によりはじめて敗れた。傷つき、倒れもたえ苦しむ息の中から、武史を息子と呼ぶ声を聞く。そして、父の秘密が明かされることになる。父は悪者によって薬を飲まされ、コントロールされていた。そのため、父は悪いことをし、戦いを繰り返していたことが語られた。父は苦しみの末変身し、やさしい元の父親に戻った。

これらの事例は子どもたちがかつての生活の中で体験した事実そのものではなく、それらの体験を象徴化した姿で表現されている。事例3では、子どもを喰らい、子どもを縛り付けるネガティブグレイトマザーを思わせる母親が表現される。事例4では過去の象徴であり、また古い自己を象徴する闇の博物館に展示された汽車（死んだ自己）、再生を思わせる新たな汽車と新たな道（線路）がつくられ、死と再生のモチーフが見られる。さらに、母親の出現を予想

するかのような海（母親の象徴）との連絡（新たな線路の開通），さらにその海からの重要な物資の輸送。が再生後の自己の変容，世界の変容を思わせる。事例5では物語のテーマとしても頻繁に用いられる，父と息子のエディバルな葛藤と，それを乗り越えて得られる父と息子の関係性の変容が物語られている。これらのモチーフは精神分析の中でも再三取り上げられる元型の出現と，現実の体験から培われてきた内界の表現が示唆されているように思われる。

遊びは，遊ぶ対象があり，その対象と共に行われる象徴的体験であり，あるいは，その対象に子どもの内的対象が投影され，その内的対象との関係が表現されることがある。そして，遊びの豊かな効果，意味は治療者あるいは対象者である治療者たちが「待てる時にのみ，患者は創造的な，限らない喜びを伴った理解に到達するのである。」（Winicott, D. W. 1971 p122）それらは，彼らがなんらかの心理的問題を形成する原因になっている現実的な問題の間接的表現として行われる。日常の生活では，子どもたちの見せる行動の多くは，彼らの環境の要請に従って，時間をかけて作り上げられてきたものであって，それは，大きく見れば，社会の要請であり，小さく見れば，その両親によってもたらされた一つの文化であり，これらは，その多くが，彼らの心の自然な流れに対して，ストレスを強いることになる。その結果，それらの要請に従って，ペルソナを発展させることになり，偽の自己を発展させ，真の自己を置き去りにしていく，そのため，『十全に機能した人間』からはかけ離れた状態になってしまう。心理療法は，これらの，過剰な圧力によって，また，偏奇した環境の中で，生活することによって生じた，歪んだ表現に対して，その内的欲求の自然な表現を活性化させる働きがあり，また，子どもたちが遊びの中で見せる行動の下にある内的な真実を語れるよう，その物質的，人的環境を整える必要がある。

子ども達のストレスは，遊びを通して具体的に，また象徴的に表現され，彼らのストレスをカタルシスする。子どもたちは，初期の母親との生活の中で，自己の内的な要求にしたがって，行動する。それは，子どもの自由な表現を受容され，共感される体験の中で，やがて，その母親と作り上げていく望ましい人間関係の基本的なスタイルである。しかし，その，自由な表現が，早い段階で阻害されたとき，彼らは，心の中に，一定の傷を負うことになる。また，彼らの家庭という小さな社会の中で，体験させられ，学び，実行している行動，意識，認識，思考が，社会の大きな秩序の中で，抑圧を受けたとき，彼らの表現スタイルは歪み，一般的には，困った行動として位置づけられることにな

る。

事例 6

小学校 4 年の E は、施設に入ったばかりの女の子である。施設に入所した原因は父親による、性的虐待であった。姉二人も父親の性的被害にあっており、E の家庭では、こういった性的なかわりが日常的にあったことが明らかである。母親も知っていながら黙認していた。父親も、自分の子どもだから放っておいてくれということで、反省の色はみられない。あるとき、指導員から叱責を受けた中学 1 年の男の子に対して性的なかわりをしたということで、注意を受けた。しかし、E は自分は何も悪いことをしていないと言い張り、自分の正当性を主張し、攻撃的になっていた。床を蹴りながら治療者をにらみつけ、連れてきた保育士をたたき、E にとってはわけの分からない大人たちの対応に反抗的になっていた。そのうちに、意識がもうろうとなり、人格がいくつかに分離したかのように怒ったり、泣いたり、笑ったりと、かなり混乱した状態になった。その後、E は小さいながらもしばらく入院することになった。

E にとって、意気消沈している男の子を慰める方法として性的なかわりをしたのは、当たり前のことであった。父親は娘たちに性的な関わりをする際に、人を慰める方法、人を愛する方法として、性的なかわりが正しい方法であると教え、E にとっては、家庭の異常な文化の中では当然の行為であった。それに従うということは、E の文化の中ではいわゆる常識の行為であり、それだけではなく、その価値基準を持って自分自身を作り上げてきた。それが否定されると、それは自分の存在の否定につながり人格の崩壊の危機を体験したことになる。つまり、彼らの問題とされる行動には、彼らのかつてあった文化が、そして彼らの内的な真実の叫びが隠されている。また、親の承認を受けることができず、母親との間で、信頼関係を築くことができなかつた子どもは、自分を認め、守り、共にいる肯定的な内的対象を形成することができず、その上に更なる強制が加えられると、彼らの行動は更なる歪んだ表現を強いられることになる。

E はその後混乱し分裂した人格が 3 通りに減少して病院から退院してくることになる。

子どもが幼少で、周囲の大人の抑圧に対して反発できず、服従している間は問題にならないが、服従させることができなくなってくると、問題行動として扱われることになる。子ども達は極端に依存的になったり、幼児性の万能感を持って周囲を支配しようとするために、行動は問題化する。また、時によって

は奇異な行動を出現させることで、彼ら特有の対人関係スタイルを表現することになる。そして、遊びという非現実的空間の中で、彼らはこれらのゆがんだ体験、彼ら特有の小さな社会体験の中で培われてきたストレスやトラウマや、我々の平均的とされている生活習慣、生活形態、対人関係からは、少々逸脱した姿を表現する。しかし、それは彼らが生きてきた歴史であり、現在の彼らを作ってきた基本になっているものでもある。彼らは、指示を与えられるのではなく、それそのものとして受容される体験の中で、関係が肯定化され、信頼関係が出来上がり、肯定的対象を内在化させ、それに支えられながら、肯定的自己像を形成していくことになるのである。

遊びの活動はホイジンハにより次の6つの活動に分類されている。

1. 自由な活動。遊ぶ人がそれを強制されれば、たちまち遊びは魅力的で楽しい気晴らしという性格を失ってしまう。遊びの活動は、秘密を暴き、秘密を公表し、そして、いわば秘密を消費するものである。要するに、遊びの活動は、秘密から秘密の性質そのものを奪い去ろうとする。
2. 分離した活動。遊びは自由で任意の活動であり、喜びと楽しみの源である。
3. 不確定の活動。遊びは、本質上、生活の他の部分から切り離され慎重に区別された活動であり、通常、時間及び空間の厳密な限界の中で完了する活動である。
4. 非生産的な活動。遊びの領域は、特別な閉じられた、守られた宇宙であり、純粹空間である。
5. ルールのある活動。遊びは、自由な活動である。しかも、それは普段の活動である。結末について疑いは最後まで残る。
6. 虚構的活動。遊びは、ルールの範囲内で自由な発見をし、ただちに発明する必要によって成り立つ。遊ぶ人の活動に許されるこの余裕部分こそ、遊びの本質をなすものであり、また、遊びが与える喜びの一部を説明するものである。

(Caillois, R. 1958 pp7-14)

これらの遊びのもつ特性と、非指示的なかわりを持って参加する治療者の存在の中で、子ども達は彼らの体験してきた世界、抑圧されている彼らの悲しみ、悔しさ、憎しみ、攻撃性を現実の空間ではなく、非現実空間の中で表現し、さらにその表現を共に体験し、共に彼らの内的な感情世界を抱えてくれる治療者という存在にささえられることによって彼らの抑圧された内的な表現

を抱えられる体験を繰り返すことになる。心理治療はこういった子どもたちの心の領域にあるストレス、トラウマの発散と、新たな人間関係形成の場となるものであり、またその媒介となるものである。そのためには、遊びが評価や、強制の中で、我々の理想とする内容に形を変えられていくものであってはならない。また、それらがその本人である子どもの心の状況とは違った形に変えられてしまうことで、自由な表現が抑圧を受ける事になってしまうと、その遊びの持つ魅力的な意味は減少あるいは消滅することになる。圧力は、彼らの、行動を更なる不適切な振る舞いへと駆り立てることになる可能性を持つ。

参考文献

- Alvarez, A. (1992) *Live Company: Psychoanalytic Psychotherapy With Autistic, Borderline, Deprived and Abused Children*
千原雅代, 中川純子, 平井正三 訳 (2002): こころの再生を求めて 岩崎学術出版社
- Axline, V. M. (1947) *Play Therapy* · Houghton Mifflin
小林治夫 訳 (1972): 遊戯療法 岩崎学術出版社
- Barton, A. (1974) *Three Worlds of Therapy-An Existential-Phenomenological Study of the Therapies of Freud, Jung, and Rogers*: Anthony Barton
馬場禮子監訳 井原成男, 三上直子, 三沢英夫 訳 (1985) フロイト ユング ロジャーズ 岩崎学術出版社
- Buirski, P. and Haglund, P. (2001): *Making Sense Together: The Intersubjective Approach to Psychotherapy Published by arrangement with Paterson Marsh Ltd. and the Rowman and Littlefield Group through Tuttle-Mori Agency, Inc*
丸田俊彦監訳・貞安 元訳 (2004): 間主観的アプローチ臨床入門 岩崎学術出版社
- Cailliois, R. (1958) *LES JEUX ET LES HOMMES*: Gallimard, Paris, France
清水幾太郎, 霧生和夫 訳 (1970) 遊びと人間 岩注書店
- 弘中正美 (2002) 遊戯療法と子どもの心的世界 金剛出版
- James, B. (1994) *Handbook for Treatment of Attachment-Trauma Problems in Children*: Lexington Books
三輪田明美, 高島克子, 加藤節子 訳 (2003) 心的外傷を受けた子どもの治療 誠信書房
- Klein, M. (1933) *LOVE, GUILT AND REPARATION AND OTHER WORKS: The Melanie Klein Trust (1975)*
西園昌久・牛島安信訳 (1983) 愛, 罪そして償い 誠信書房
- 丸田俊彦 (2002) 間主観的感性 岩崎学術出版社
- Rogers, C. R. (1963) *The concept of the fully functioning person*: *Psychotherapy; Theory, Research and Practice*, pp17-26
—— (1965) *A humanistic conception of man*: In R. E. Farson (ED.), *Science and Human Affairs*, Science and Behavior pp18-31

- 村山正治 編訳 (1967) 人間論 岩崎学術出版社
- Sameroff, A. J. and Emde, R. N. (1989) Relationship disturbances in early childhood: developmental approach edited Copyright 1989 by Basic Books, Inc.
- 小此木啓吾監修 井上果子 訳 (2003) : 早期関係性障害 岩崎学術出版社
- Winicott, D. W. (1971) *Playing and Reality*: Tavistock Publication Ltd, London: *Associated Book Publishers Ltd*
- 橋本雅雄 訳 (1979) 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社

キーワード 非指示, 遊び, 関係学, Organising principle